

い、生態系の一部として生き、生きものたちの声、川のせせらぎ、星の瞬きにも耳を傾け、保全するために改革をおこなう存在である。大木さんはいつも穏やかな物腰、優しいまなざしで話を聴き、問いかけ、未熟な私に知識を授けてくれた。華やかな舞台で成功を披瀝するような人ではない。何事もそうであるが本当に重要なことは物事の一番奥に潜んでいて、表からはなかなかみることができない。

大木さんはそんな人だった。尽くすことによって学会をリードした、偉大なるサーバント・リーダーである。

ちいさな者たちを弁護し続けた人

井坂康志

(本誌責任編集者)

何度会っても初対面のような気がする人もいる。初めて会うのになぜか懐かしさを感じる人がいる。あなたはまぎれもなく後者だった。

お付き合いしたのは学会設立以降のことながら、小さい頃から知っている、あるいは知っていただいている方のような気がしてならなかった。年齢のせいもあったかもしれない。あなたは私より32歳も年上で、父と子ほども違う。あくまでも私からの印象だけれど、その親和力は肉親以上だった。そんな方と年報の編集をともにさせていただけたことを幸せに思う。

ささいなことまで何でも相談に乗っていただいた。救われたことは一度や二度ではない。そのとき経験の厚み以上のもの、あえていえば認識能力としかいいようのないものがどれほど人の行動に力を持つかを知った。あなたは「年の功ですよ」と笑ったが、それが流れた時間以上の何かであることを私は知っている。

あなたの特徴は目だった。湖面のような静かな微笑みをたたえた目だった。そこには深いコミットメントがあった。

「見守る」という日本語がある。目線で相手を守ろうとしている。その目は相手の目線と感情の動きに根底からの関心を持つ。相手の目線と自らの目線を合わせ、それでいて目に見えない何かを探し求めている。そして相手の目に映る世界を通して、世のちいさな者たちのよろこびもかなしみも、あらゆる心の

機微を捉え、触知し、理解し、慰め、いたわり、保護しようとしていた。

専門のマーケティングについても同じだった。マーケティングとはこの世界の最もささやかな存在を気かけ、そこに心を寄せつづける行為なのだということをおなたから教わった。人が生きることに伴うかすかな声なき声に耳を傾け、身を挺してかばい、そして断固たる意思をもってそれらを弁護し続けることなのだと思った。あたかもドラッカーが行ったように――。

あなたがこの分野をあえて選び、力を投入しつづけた理由が今になってわかる気がする。

そんなあなたがいなくなって、この世がいくぶんさびしいものになります。